湘南学園だより

SHONAN GAKUEN 127 2017.10.3 DAYORI

発　行：湘南学園だより編集部

contents

湘南学園と四季への想い	理　事　長	河野重男	02
総合学園のもつ価値と可能性	学 園 長	川井陽一	03
広い視野から学園と教育を考えた第７回全学教研	実行委員長	熊野谿　寛	04
預かり保育『ぞうさん』	幼　稚　園	姫野貴美子	05
「夢をみる力」を付ける	小学校校長	河本洋子	06
アフタースクール　開校４年目を迎えて	放課後ＮＰＯアフタースクール		07
「湘南の知性輝く気品高い学園生を目指して　２０１７」の現在	中 高 校 長	榎本勝己	08
グローバル＝魅力ある人間になり自分の力を世の中に活かす	中高グローバル教育委員会	荒木伸浩	09
「アメリカトップ大学視察」参加報告	中高学習進学指導主任	里吉　正	10
食育とは?	湘南食育ラボ栄養士	菊地あゆみ	11
「役割と変わらぬ応援」	後援会会長	田辺真理	11
学校法人からのご報告			12

湘南学園と四季への想い

理事長　河野重男

この春に湘南学園では、幼稚園60名、小学校94名、中学校201名、あわせて355名の新入生をむかえ、新学期がスタートしましたが、夏休みを終えて、早くも年度後半となりました。

この秋には、幼稚園の「らんらんにこにこらんど（運動会）」、小学校の「たいいく表現まつり」、中学高等学校の「学園祭」等思い出に残る行事がいっぱいです。

秋の楽しみのひとつに、「食欲の秋」と「芸術の秋」を兼ね備えた風習であるお月見があります。

お月見で、おいしいお団子やしみじみとした一杯をいただくのも良いものですが、時には偉大な俳人の情緒に思いをはせるのも良いかもしれません。

まずは情景が目の前に浮かぶ名句を2句

「名月や池をめぐりて夜もすがら」（松尾芭蕉）

「あの月をとってくれろと泣子哉」（小林一茶）

自由律の中で好きな1句

「なんと丸い月が出たよ窓」（尾崎放哉）

俳句ではありませんが、何とも心地よいリズムの1句

「つきづきにつきみるつきは多けれどつきみるつきはこのつきのつき」（狂歌）

対話と相互理解の大切さ

前回の学園だよりに、VUCAワールドと表現される世界では、ディスカッションによる選択的意志決定ではなく、ダイアローグ（対話）による相互理解（お互いを尊重しながらの意志の共有）が必要と書きましたが、スポーツの世界でも、共通する面がある様です。

公益財団法人日本体育協会が公認スポーツ指導者等向けに発行している機関誌「スポーツジャパン」の最新号に、東海大学スポーツ医科学研究所の加藤准教授の記事が掲載されています。

加藤さんは、本年6月に行われた「夢のスーパー給食」の企画でご来校いただいた、リオデジャネイロオリンピック競泳女子200m平泳ぎ金メダリストである金藤理絵選手を指導されている方です。

加藤さんは、金藤選手の才能を高校生時代に見出し、世界一になれると確信して、猛練習と「追い込むコーチング」で、短い間に北京オリンピック7位入賞、ユニバーシアード銀メダルを獲得するまでに育てます。ところが、世界記録達成を目前とした時期に、金藤選手は、つい間板ヘルニアを発症して長い低迷の時期をむかえ一時は引退直前まで追い込まれました。

その頃に行っていたのは「どんなに反発されても無理やりやらせるコーチング」であったと言いますが、それからは毎日記入しているノートに練習テーマ、気づいたこと、心情などを細かく記録して行き、選手との対話を重ねることによって相互理解を深化する「選手と同じ方向を向いたコーチング」を重ねることにより、5年後に見事に金メダルを獲得しています。

夢の力と学ぶ力

スポーツ選手に限らず、何等かの夢を実現するためには、夢を描く力と同様に、自ら学び成長する力が重要だと思います。

この夏には、教職員の方々も様々な研修や学びの場で自己研さんに励まれていますが、私自身もできる限りその様な場を多く持てるように心がけています。

8月末に福岡大学を会場にプロジェクトマネジメント学会の研究発表大会が行われ、100を超えるテーマの発表がありました。

その中で特に印象深かったのが、キーノートの一つとして行われた、九州旅客鉄道株式会社　鉄道営業本部担当部長である　仲さんの「新たな鉄道の旅をつくる挑戦」と言う発表です。

内容は日本初の豪華クルーズトレインである「ななつ星」実現のためのプロジェクトストーリーとマーケティング戦略に関するものです。

「ななつ星」は、「九州を世界へ発信する」・「夢と情熱世界一の列車サービスを目指す」とのコンセプトによってプロジェクトがスタートし、最近の募集状況で応募倍率が平均16倍（最高166倍）、リピータ率16％の素晴らしい実績を達成しています。

「ななつ星」の成果を考えると、列車自体の豪華さ（部屋の洗面台は柿右衛門製だそうです）だとか、料理の食材や著名な料理人、沿線の歓迎や景観などの観光資源に目が行きがちになりますが、最も大切にしているのは、「クルーの接客と旅行開始前からのコミュニケーション」だそうです。

幸運に恵まれて予約ができたお客様には、最大で数か月先の出発日まで、ツアーデスクのメンバーが毎週の様に情報提供と要望の把握を反復します。その結果としてツアー参加者は、「旅行に入る前に夢を膨らませ、旅行中に夢を実現し、帰ってから夢を大事な思い出にできる」のです。

湘南学園でもそんな風にできると良いですね。

学校法人湘南学園の現行の寄附行為では法人役員の任期を、西暦偶数年の4月1日より翌々年3月31日までの2年間と定めていますので、現在の法人役員の任期は残り半年弱となりました。

短い期間ではありますが、学園に集うさまざまな有識者の方々の力もお借りし、真に「子供たちの成長と未来のために」資する法人運営を行ってまいりたいと考えておりますので、引き続き皆様のご協力をお願い申し上げます。

総合学園のもつ価値と可能性

学園長　川井陽一

「総合学園」としての価値を高める
―第7回全学教研より―

建学の精神を根底に据え、幼小中高からなる総合学園としての魅力と特色を磨くことは、湘南学園の学園づくりを考える上で、何よりも重要なことであると思っています。

「いま、子どもたちの生活をとらえなおす」をテーマに、8月30日（水）に開催された第7回全学教研は、総合学園としての教育力を高めるための意義ある場となりました。

全学教研が各パートをこえて全教職員が一堂に会する貴重な機会であることはご案内の通りです。特に今回の研究協議等においては、私学としての特色を大切にしながら、総合学園としての本学園を今後どのように展望するかということに関し、主体的かつ熱心な議論が行われたことが印象に残っています。

総合学園としての魅力と特色を確認することに加え、総合学園としての価値を発見し、その価値を高めようとする全学教研から、本学園の新たな可能性を感じた次第です。

グローバル教育の充実と交流の拡大

今年度に入り、本学園のグローバル教育に関し一層の進展がみられることを実感しています。この夏休みを例にあげても、小学校における「葉山インターナショナル・サマースクール」、「イングリッシュキャンプ」、中高における「オーストラリアセミナー」、「カナダセミナー」、「イングリッシュキャンプ」、「米国クレアモント大学におけるエンパワーメントプログラム」、「ポーランド・リトアニア　ヒストリーツアー」等のプログラムを実施し、多くの児童・生徒が熱心に取り組み、成果を収めています。さらに、夏休み以外の取組やロータリークラブのご支援による交換留学制度も学園に多くの実りをもたらしています。多くの場面から、グローバル教育の内容面の充実を確信しているところです。

また、六月には、タンザニアの「さくら女子中学校」、さらにリトアニアの「リトアニア健康科学大学付属ギムナジウム」の生徒のみなさんをお迎えしました。本学園としては初めての国々のみなさんをお迎えし、有意義な交流をもつことができました。

もうひとつ本学園にとって特筆すべき出来事がありました。

7月29日（土）に、湘南学園小学校ホールを会場に行われたイェール大学男声合唱団の公演です。

1701年に創立されたイェール大学は、名実共に米国を代表する大学です。イェール大学「ウィッフェンプーフス合唱団」は、百年以上の歴史をもち、毎年世界ツアーを展開している定評ある合唱団です。この度、多くの方々のお力添えにより、本学園に同合唱団をお迎えできたことを誠にうれしく思っています。400名を越える来場者の方々から大好評を博した男声合唱団の公演に加え、公演に先立ってのイェール大学学生と本学園生とのランチ交流会は、得難い交流の場となりました。

本学園カフェテリアを会場に行われたイェール大学学生と本学園卒業生及び在学生が参加した交流の様子を見ながら、こうした交流が、生徒の成長にそして学園の発展にも大きく寄与するものと確信しているところです。なお、イェール大学の本学園公演は、次年度以降も継続の予定です。

グローバル教育については、内容面の充実、交流の輪の拡大に加え、何よりも日常の教育活動との結びつきが大切であると考えています。総合学園としての魅力と特色を生かしながら、本学園ならではのグローバル教育が一層進展していくことに大きな期待を寄せています。

総合学園としての豊かな可能性

昨夏はスタンフォード大、ハーバード大等の米国大学を、そして、今夏はオーストラリアの姉妹校ノックス校を訪問する機会をいただきました。その際、同様に感じたことがあります。それは、今後の本学園を考える上で、「世界標準」、「リベラルアーツ」、「多様性と共生」を取り入れるべきであるということです。

既に述べているように、建学の精神を基に培われてきた本学園の良さは何より大事にしつつ、学園の一層の充実、発展に向けて、「世界標準」、「リベラルアーツ」、「多様性と共生」の三つの柱を学園の幼小中高の今後の教育活動に生かしたいと考えています。

併せて、『学園だより』（126号）に記した「気品高く困難を楽しむ」は、本学園の新たなステージに向けた挑戦のキーワードとして再度掲げたいと思います。

総合学園としての魅力と特色を磨き、総合学園としての価値を発見し、その価値を高めようとするところに、湘南学園の豊かな可能性があると確信してやみません。

広い視野から学園と教育を考えた第7回全学教研

全学教研実行委員会実行委員長　熊野谿寛

8月30日、今回で7回目を迎えた湘南学園全学教育研究集会が、「いま、子どもたちの生活をとらえなおす」とのテーマで開催されました。

今回の全学教研は、狭い意味での教育課程にとどまらず、学園に学ぶ子ども達の姿をより広い視野から見つめ、とらえ直すことをめざしました。特に全体会では、これまでとは異なる視点からの報告をお願いしました。

新鮮だった全体会報告

午前中の全体会では、3つの新しい視点からの報告がありました。

幼稚園からは、〝預かり保育『ぞうさん』から見える子ども達〟と題して、幼稚園で預かり保育を担当されている姫野貴美子先生から、この5年間で希望者が数倍に増えてきた幼稚園の預かり保育の現状とその中での子ども達の様子、今後へ向けた課題などについて、報告していただきました。

小学校からは、「私立校におけるアフタースクールの役割と可能性」と題して、NPO放課後・湘南学園アフタースクール副責任者である中條ゆきお氏から、アフタースクールの歩みと現状、今後にめざすものなどについて報告していただきました。

中高からは、「学園の子どもたちと食育について」と題して、NPO湘南食育ラボ・理事長である小田拓也氏から、カフェテリアでの3年間の取り組みをふまえて、ラボの取り組みと今度の食育でめざすものなどについて報告していただきました。

これらの報告は、狭い意味での「教育課程」には含まれないものですが、学園に集う子ども達とその教育にとって、とても大きな意味のある取り組みです。しかし、私たち教職員も、日常的にはなかなかその活動の全体像や現状を知らず、その価値を見落としがちです。今回の全学教研を通じて初めて、学園の専任教職員全体で学園の教育を広い意味で支える、これら三つの活動について知ることができました。これが今後の学園の発展にとって意味あるものとなることを実行委員一同としては願っています。

活発な議論となった分科会

午後の分科会でも、いくつかの分野で従来とは異なる分科会を設けました。

まず継続して設けられた「授業」の分科会では、「主体的で深い学びをどう求めるか」とのテーマにそって、小学校4年　「国語・総合『書く』授業」（報告者　萩野昌美先生）、中高「実験とICT教材を活用した理科授業」（報告者　相崎貴洋先生）の二つのレポートが報告されました。いずれも積極的に「子ども達が主体的に考える深い学び」を求めた実践で、参加者の間で活発な意見が交わされました。「主体的で深い学び」は、全学教研が継続して求め続けてきたテーマです。今後も各学校で実践をすすめ、様々なアプローチから議論する場を設けて行きたいと思います。

今回、初めて「幼稚園から小学校へ　とまどいと成長」と「小学校から中高へ　変化と成長」の二つの分科会を設置しました。このうち、「幼稚園から小学校へ　とまどいと成長」の分科会では、「ゆっくり、じっくり花開く子どもたち」（報告者　木村陽一郎先生）と題して、学園の幼稚園から小学校に進学した子ども達がどのようになじみ活躍していっているかが報告され、子ども達の具体的な姿を中心に、幼稚園と小学校の双方から活発な話し合いが行われました。また、「小学校から中高へ　変化と成長」の分科会では、『生活面と学習面における成長と変化』（報告者　田中清章先生）と題して、中1から高3までの6年間を持ち上がって卒業させた経験をふまえつつ、今年の中1の子ども達とどう向き合っているのか、子ども達がどう変化してきているのかが報告され、こちらも活発な話し合いが行われました。

総合学園として湘南学園にとって、また各学校の教育活動の今後にとって、今回の分科会がきっと役立つものと思います。

子ども達と考えあった自主活動

「自主活動」の分科会では、生徒会総務委員会に加えて、今回初めて小学校から児童会執行委員会三役の3人の子ども達が参加してくれました。分科会では、中高・生徒会総務委員会有志から、「熊本益城町・阿蘇市を視察して」と題して昨年度からの被災地支援から今年の被災地訪問の取り組みと今後についての報告を受けて、今後の課題について教員・生徒が共に考え合う話し合いが活発に行われました。また、小学校の児童会と中高の生徒会とが結びついて取り組める可能性も見えてきました。学園全体で「自主活動」について子ども達と共に議論できた事は、きっと今後への大きな一歩の土台となるでしょう。

90周年に向け総合学園としての新たな発展を

第7回湘南学園全学教研に向けては、各学校から選出された実行委員が中心となり、川井学園長先生の下で4月から8回の会議を重ねて準備をして参りました。

しかし、今回の全学教研は、忙しい中でレポートを引き受けて下さった報告者の先生方、全体会報告を引き受けて下さったNPOの皆様、さらには熱く語ってくれた生徒会総務委員諸君など、たくさんの方の参加があってこそ、開催できました。

また、当日の助言者・共同研究者として、都留文科大学・佐藤　隆先生（全体会・「授業」分科会）、和光幼稚園・小学校　校園長・北山ひと美先生（「幼稚園から小学校」分科会）、浦安市立小学校教諭・塩崎義明先生（「小学校から中学」分科会）、小田原市立中学校教諭・柏木　修先生（「自主活動」分科会）にご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

こうした多くの方々の善意と力を、私たちは今後の学園づくりと教育に結びつけていきたいと思います。第7回全学教研から明日の湘南学園にむけた歩みを考えた、そんな一日となったかと思います。

預かり保育『ぞうさん』

幼稚園　預かり保育担当　姫野貴美子

【預かり保育のスタート】

幼稚園の預かり保育は平成25年度より始まり、今年で5年目となります。子ども達が馴染みやすく呼びやすいよう『ぞうさん』と名付けました。「今日ぼく、ぞうさんなんだぁ。」保育後、そんな声が子ども達から聞こえてきます。

本来であれば保育後は帰宅して、おやつを食べながら幼稚園の話をしたり、体調に合わせてのんびりと過ごしたり、時にはお昼寝をすることもあるでしょう。親子の時間、その子のペースで過ごす時間を引き続き幼稚園で過ごすわけですから、1人ひとりの様子に合わせ無理のないように、預かり保育では家庭にいるような、ゆったりとした温かい雰囲気と、安心して過ごせる環境を整えています。保育者も常時3人から4人が子ども達と共に過ごし、1人ひとりの健やかな成長を願って、遊びや生活を見守りながら働きかけや促しを行っています。利用児が多い時には保育者を増やし、安全にも配慮しています。

【専任保育者がいることで】

昨年度までは預かり保育専門の有資格者3名が担当をしていましたが、今年度から年々増加する預かり保育の利用児、昨今の子ども達を取り巻く社会状況の変化、子育て支援の重要性を受け、専任教員である私が加わり中心となって進めていくことになりました。今まで学園の保育に携わってきた経験を活かし、保育中の活動を把握しながら発達段階に合わせ、子ども達の成長につなげていきたいと思っています。また担任との連携も図りながら、子ども達にとっても保護者にとっても、安心できる場にしていきたいと考えています。

【1人ひとりに合わせて】

4月は、入園して初めての環境の年少児、進級したばかりの年中児や年長児、園生活だけでなく、家庭での環境（復職・介護・出産など…）が変わったりと、子ども達は喜びと共に、緊張や戸惑いなどを感じ、肉体的にも精神的にも疲れをみせることもありました。

預かり保育では、3時におやつをいただきます。お家の方が用意してくださったおやつをみんなで食べることで「ホッ！」とひと呼吸でき、お腹も心も満たされます。また、眠くなった子は布団を敷いてお昼寝ができるようにしています。

1人ひとり体力や生活のリズムが違うので、成長に合わせた対応をしながら、安心感や楽しさにつながるよう心がけています。

【異年齢のつながり】

預かり保育は毎日利用する子、1週間に2・3日利用する子、時々利用する子と、その日によって人数もメンバーも、利用時間も様々です。3歳・4歳・5歳の子ども達が共に過ごす中で、自然な交流が生まれます。

年長児の話すことや行動する姿は、年少児や年中児にはとても魅力的のようで、よく見て聞いています。自分も同じようにやってみようと真似したり、「教えて！」と頼んで自ら寄り添っていく姿があったり、憧れの気持ちを抱いているようです。また、初めての集団生活を送る年少児を年中児や年長児は優しく受け入れ、色々なことを教えてあげたり、手伝ってあげる姿があります。優しくしてもらった年少児が「○○おにいちゃん、ありがとう！」と言うと、年中・年長児は照れながらも、とても嬉しそうにしています。

少子化の現代ですが、異年齢の子ども達が一緒に過ごすことで、相互に作用しながら疑似きょうだいのように育ち合っていく場となっているようです。日々、そんな異年齢のつながりが、あちらこちらで生まれています。

【子育て支援の中で】

毎年、現状を把握しながら、利用時間や長期休みの際の日程など、見直しを行っています。3年目からは保育後だけでなく、朝、保育前の30分も預かり保育を行うようになり、今年度より終了時間が18時となりました。保育後の利用児は当初一日平均10人程でしたが、今年に入ると30人から40人の利用があります。仕事をしている方だけでなく、急な用事、介護など様々な理由があることと思います。保護者にとっても子ども達にとっても安心できる環境を整え、その成長に力を注いでいきたいと思います。

近頃では、子育て支援や待機児童問題など、よく耳にします。とても大切なことだと思いますが、便利さや親の側からの視点ばかりが優先されてはいないだろうかと危惧しています。親子で過ごす（育ち合う）貴重な時間が見落とされてはいないだろうか。親子の時間は長ければいいというものではなく、質が大事ですが、子育ては、じっくりと『手間暇をかける』ことが大切です。

時代の背景を照らし合わせながら、人として育っていく土台を培う大切なこの幼児期に、子ども達にとって何が大切なのかを見つめながら、子どもの側に立った預かり保育でありたいと思います。

体験を通して「夢をみる力」を付ける
～「夢を実現」することは楽しいこと～

小学校校長　河本洋子

未来を担う子どもたちをクリエイティブな子に育てること、いかに発想豊かな子に育てるかが、これからの子育てのポイントとも言われています。

そのためには、夢を実現した人に赤裸々な思い出や紆余曲折、困難をどう乗り越えてきたかを語っていただき、「夢をみる力」の引き出しの数を増やしたいと考えます。

オリンピック・パラリンピック選手、女優、アナウンサー、タレント、博士など多岐にわたり、「熱き心」をもつ仲間の輪は、競技・国籍・ジャンルを超え広がり続けています。

二〇一七年三月、パラ陸上の高桑早樹さんに続いて、一学期は北澤豪さんと金藤理絵さんをお招きしました。

【1】元サッカー日本代表選手 北澤豪さんから学ぶ

五月二二日に北沢豪さん（サッカー元日本代表）が本校に来園し、子どもたちにスポーツの楽しさを知ってもらう「victoryスポーツ教室」を行いました。

第一部が小学五・六年生と保護者ら二五〇名の講演会。野球少年から、小一の夏にサッカーを始めた経緯やエピソード、その後の経験を披露し、話の途中からは子どもたちを舞台に上げ、椅子とボールを使った簡単なシュートゲームで親交を深めました。現役引退後は社会貢献活動にも積極的に取り組む北澤さんは、

- **「準備が全て」**
- **「自分自身を理解して、正しく努力すること」**
- **「どういう自分かをよく知って頑張ることが、夢実現の近道」**

と講演を締めくくり、質問コーナーでの「不安だったことはありますか?」に対して、

- **「不安はいつもあります」**
- **「今までやってきたことしかできない」**
- **「ラッキーはない」**

と、準備することの大切さについて熱く語られました。

また第二部のサッカークラブ（小学生）・サッカー部（中学生）へのボールを使った実技指導では、北澤さん自ら汗を流し、

- **「聞く力と発想する力、集中力の大切さ」**
- **「ボールを持ったら、すぐに前を向く」**

と、サッカーの基本をたたきこんでいました。

【2】金メダリスト 金藤理絵さん、本校に来たる

～超人シェフと超人アスリートによる〝夢のスーパー給食〟～

リオ五輪・女子競泳二〇〇m平泳ぎの金メダリスト、金藤理絵さんが六月七日に本校に来園されました。有名シェフ東京広尾のイタリア料理店の後藤祐司さんがメニューを考案、調理にも参加して、四年生との〝夢のスーパー給食〟は大いに盛り上がりました。

～食と運動の大切さ～

トークセッションは、金藤さんの小学校時代のお話で、

- **「昔は好き嫌いがあって、きのこを半泣きで食べていた。でも半分でも食べようと努力していた。運動は、ドッジボールや縄跳び、スキー、水泳に取り組み、六年生で身長は一六〇cmを超えていた。」**

と、当時を振り返っていました。小三の時に水泳を習い始めた自身を例に、

- **「元気に身体を動かして、きちんと食べることが夢を叶える一歩」**
- **「目標を持って、信じ続けて、がんばって」**

と、励ましの言葉と三〇キロを七時間もかけて泳いだ話もありました。

最後に、金藤さんが「金」メダルを子どもたちに見せてくれた時は大興奮でした。金藤さんに会いたいとプールで待っていた中高生も大喜び。金メダリストが足を踏み入れたこのプールで、水泳の授業、中高生は部活動をがんばっています。

特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール

アフタースクール　開校4年目を迎えて

～お預かりとプログラム両方で様々な体験～

２０１７年４月８日に開校４周年を迎えた湘南学園小学校アフタースクール。開校初日は３名のお預かりから始まったアフタースクールも現在では１日１００名を超えるお子さまが利用をする日もあります。今回は預かりの様子や開校から実施しているイベントやプログラムについて紹介をさせていただきます。

【お預かり】

子どもたちは、遊びながらたくさんのことを感じ学んでいきます。他者との関わり方や思いやり、ルールなども遊びを通して理解していくことができます。そして、元気よくお友だちと体を動かすことによって健康な体も育まれます。その為、アフタースクールではこの「遊び」をとても大切にしています。また、様々な学年の子が一緒に過ごすアフタースクールではその関わりの中で時にはうまくいかないこともあります。そんな時アフタースクールでは上の子は下の子を思いやる気持ちを持って、慕ってもらう喜びを感じてもらいます。下の子には上の子と楽しく遊べるようにそのつながりを子どもたちと一緒につくっています。

【イベント】

開校より預かりの中でも様々なイベントを実施してきました。ひとりではなく、お友だちと一緒に取り組むからこそ楽しいこと、お家ではなかなかできないようなことをスタッフで企画しています。

アフタースクールでは「ただスライムをつくるだけでなく、スライムのお風呂に思いっきり入りたい」「学校全体を使って宝探しゲームをしたい」など子どもたちの希望をかたちにしてきました。また、ＢＩＧシリーズで富士山ゼリーやデカオムライスなど子どもたちが驚くようなお料理やお菓子作りも実施してきました。

今年のデカオムライスはなんと70個以上もの卵を使用して作り、子どもたちも大喜びでした。このようなお預かりのイベントもただ子どものリクエストにこたえるのではなく、その希望をかたちにして、さらに楽しく体験ができるようにスタッフで日々準備をしています。子どもたちのやってみたいという声に寄り添いながら一緒にイベントをつくっています。

【プログラム】

現在、アフタースクールでは毎週行う定期プログラムと１日～数か月かけて行うスペシャルプログラムを実施しています。プログラムは工作やスポーツ、料理や職業体験など、みんなが大好きなものから変わった体験のものまで様々な種類のものを実現してきました。また、長期休みには海にも出て、サーフィンやシーカヤックなど湘南ならではのプログラムも多数実施してきました。

多くのプログラムを開催してきて、講師の専門的な知識も不可欠ですが、それ以上に子どもたちへ指導する際に魅力を伝えられるか、憧れをもってもらえるかが重要だと分かりました。子どもたちと関わる大人がその憧れになることで、将来はこうなりたいと具体的な夢へとつながります。講師にはこういった点も意識しながらお願いをしています。

放課後は子どもたちにとって「自由」な時間です。やりたいことに挑戦をする。どうしてもあわなければ違うことに挑戦をしてみる。それができるのも放課後ならではです。ただ色々な体験をするだけでなく、子どもたちが楽しくプログラムを受けられるよう気持ちを整えてあげることも大切だと感じています。

アフタースクールでは今後も保護者のみなさま、学校と協力をしながら、子どもたちの放課後をさらに充実していけるよう取り組んでいきます。

「湘南の知性輝く気品高い学園生を目指して 2017」の現在

中高校長　榎本勝己

中高着任二年目の前半期が過ぎようとしています。この前半期を振り返り、その主な取組みをご紹介します。

①在リトアニア日本大使の湘南学園来訪は、グローバルリレーションズの可能性を示すことに

「ポーランド・リトアニアヒストリーツアー」（今回で4回目）の取組みを通じて、湘南学園とリトアニアとの間には相互理解と連携が図られてきました。そうしたなか、新年度早々に在リトアニア重枝駐日大使の湘南学園訪問をうけ、懇談がなされました。

2020年東京五輪の際には平塚市がリトアニアチームのホームタウンになるということもあり、湘南地域とリトアニアとのスポーツ文化交流等をも含めて、新たな展開が始まったといえます。

②生徒の「夏力」から

夏休みに入るや否や夏期講習、合宿講習が始まり、イングリッシュキャンプ、カナダ、オーストラリアセミナーと続き、加えて今夏初めて「エンパワーメントアメリカセミナー」（＊荒木論稿参照）も開催しました。こうした新たな挑戦は、世に言う「成長型思考」を生み出すきっかけになるのかも知れません。

部活動では各部共に熱中症に気をつけて夏期合宿、各種大会にむけた競技力の向上や民主的部活運営にむけた取組みを積み重ねていました。またスポーツ科学という面から理論、栄養、メンタル等人間科学の視点を大事にして「主体」を科学し学んだことでしょう。

③湘南学園ESD教育の新たな可能性をひらく「クラウドファンディング」

持続可能な社会の担い手を送り出すため、生徒の皆さんが主体的に取り組む「PBL」（課題解決型学習）の実践は、「湘南学園ESD」教育の特色といえます。

そこで「クラウドファンディング」を媒体として、生徒の皆さんの課題認識からくる様々なアイディアを社会の人々へ広く問いかける仕組み、つまり学内での学びと社会との結びとその往還を果たすツールとするものです。湘南学園教育の新たな可能性を秘めるこの取組みにご注目いただき、ご支援をいただけると幸いです。

④教員の夏の学びから

教員も豊かな興味関心を抱き、それぞれの専門性を一層深める取組みを行いました。昨年に引き続き教育振興基金の援助をいただき、2名の教員が「米国トップランキング大学視察研修」に、英語科教員2名が「エンパワーメントプログラム教員セミナー」に参加していただきました。また民間教育研究団体の大会や各種研修会などへの参加も行われました。

そして夏の終わりには「全学教研2017」が開催され、教員自身がこれまでの教育の振り返りや、そこから見つけた新たな課題、新たな研究状況を自らの教育実践に取り入れることなどを含め、後期からのより質の高い授業を目指して準備を進めてきています。

⑤イェール大学男声合唱団「ウィッフェンプーフス」公演を地域の皆様と共に

ロータリー藤沢の関係者のご協力により、7月末に学園小学校ホールを会場にイェール大学男声合唱団の公演が400名を超える視聴者により成功させることができました。公演に先立ち、中高ロータリーアクトクラブの生徒の皆さんや海外留学体験の皆さんなど約40名の皆さんと共に出演者ウエルカムランチパーティが和やかに行われました。「鵠沼文化」が根付くこの地域の皆様と共に、素晴らしいこの公演を楽しめたことを心から感謝しています。

⑥中高「学園祭」成功裡に無事終了

第67回を数える湘南学園学園祭が、9月30日（土）、10月1日（日）に開催されました。学園祭実行委員の生徒の皆さんは、夏休みより準備を進める一方、クラスで、部活でと企画を練り、湘南学園の生徒会文化を表現しようと頑張りました。

保護者の皆様には多数ご来場いただき、バザーも盛大に行われました。また生徒の皆さんの取組みを励まし評価をいただきましたこと、御礼申し上げます。

⑦2018年度中学校入試にむけて

今秋より、2018年度入試に向けた取組みが本格化します。学園創立84年、中学創立70年の歴史の地点に立ち、湘南学園の教育活動が築いてきた高みと課題を改めて確認し、あるべき歴史社会を想像し創造するチカラを育成することを目指して力強く進んでいきます。

保護者の皆様をはじめ同窓会OB・OGの皆様、後援会の皆様にも、湘南学園中学校高等学校に相応しい受験生を一人でも多くご紹介いただきますようお願いいたします。

グローバル＝魅力ある人間になり 自分の力を世の中に活かす

中高グローバル教育委員会　荒木伸浩

海外セミナーに参加した生徒より

「アメリカセミナーでの体験は、とても充実した素晴らしいもので本当に満足しています。今まで日本では感じることのなかった『もっと英語の勉強を頑張ろう！』という刺激と意欲をもらいました。又、将来のことをもっとよく考え、Fulfilling Liteを送るためにはどうすればいいかを自分に問うチャンスをこのセミナーは私に与えてくれました。もちろん英語のスキルもアメリカに来る前に比べたらずっと上達しました。本当にこのアメリカセミナーに参加して良かったと思っています！」

これは、本年度初めて実施した『エンパワーメントアメリカセミナー』に参加した生徒の声です。

学園中高グローバル教育10年の歩み

湘南学園中高では、短期海外研修としては、2005年度の第1回カナダセミナーを皮切りに、これまで、オーストラリアセミナー・イングランドセミナー・韓国セミナー・韓国英語村ツアー・台湾セミナー・ポーランドリトアニアヒストリーツアー・ロータリークラブ台湾青少年交換研修旅行などに生徒を参加させてきました。又、6～8週間程の中期海外留学として、メルボルンの姉妹校であるノックススクールに、2011年度より延べ17名の留学生を派遣してきています。

1年間の海外留学への発展

さらに、ロータリークラブの1年間青少年交換留学に、2014年度から、ブラジル・フランス・スウェーデン・アメリカの4ヶ国に、合計5名の生徒を高校生親善大使として送り出しています。又、昨年度からロータリー以外にも、AFSやアユサ等の海外留学斡旋団体を通じて、1年間の海外留学に出かけて行く生徒数が増え、本年度は延べ9名の生徒が、チェコ共和国・コスタリカ・カナダ・アメリカ・ブラジル・フランス等の国々で、約1年間に渡る海外留学生活を送ります。

念願のアメリカへ！そしてエンパワーメントプログラムをスタート！

この夏に始めたエンパワーメントアメリカセミナーは、2020年の日本の大学入試改革だけでなく、10年20年後のさらなるグローバル社会の中で生きていくことになる現在の生徒達にとって、身に付けておくべきとても大切な力を養うために新たに設置された企画です。このセミナーの柱は、英語を使ってのグループディスカッションと英語によるプレゼンテーションです。

グループの構成は、本年度は、3名の学園生に対して、1名のスチューデントリーダーと呼ばれる現地の大学生が入り、全体を統括する英語の先生の指導のもとで授業が進んでいきます。そして、授業の所々で、Let's begin by brainstorming! の指示で、設定されたテーマ毎に思い付くままに自分の考えを出し合い始めます。最終的には、グループ毎にプレゼンを作成して、それらを発表し合います。

これからの世代に求められる力とは

ひょっとすると、日本人は、これまでの日本の教育システムの中で、すでに存在する答えに速くたどり着くための訓練を徹底的に受け、こうしたことについては、そこそこ得意であったのかも知れません。しかし、まだ答えのないものを仲間と一緒に創り出していくことについては、少々不慣れなのではないでしょうか。アメリカセミナーで大切にしていることは、まずは自分の思っていることを英語で他者に伝えようとする姿勢です。そして、相手の意見を取り入れながら、物事を創造していこうとするトレーニングを徹底的に行います。こうした取り組みで培われた力が、今まさに、社会の中で強く求められ始めているのだと思います。

グローバルになるこれすなわち

さて、湘南学園は、生徒達が益々進行しつつあるグローバル社会の中で、人生を生き抜く力を付けて欲しいと願っています。そのために生徒達には、広く海外の文化や価値観に触れる機会を多く持つと共に、日本についての認識もしっかりと深め、クリエイティブな柔らかい頭と人々とのコミュニケーション力を備えた魅力ある人間になってもらいたいです。そして、自分の持てる力を世の中に活かし、誰もが平和で豊かに生きれる社会を構築していく主人公であって欲しいと思っています。

アメリカトップ大学視察　参加報告

中高学習進学指導主任　里吉　正

自分は何者なのか？

『Who you are』が大切なんですよ。今回訪問した大学のアドミッションオフィサーが言っていた言葉です。「自分が何者なのか」を語ることができるアメリカの教育とはどのようなものなのかとても興味がわきました。因みにアドミッションオフィサーとは、大学に相応しい生徒を獲得する部署に所属する方です。日本の大学のアドミッションセンターは、大学の広報活動が主な仕事ですが、アメリカのアドミッションオフィサーは広報活動をし、さらに合格判定にも携わることがほとんどです。つまり、企業でいうところの人事部のような役割を果たしています。

サンノゼ州立大学
トニー・スミスとジョン・カーロスの像

アメリカの大学の種類と入試制度

さて、アメリカの大学には、総合大学（University）、専門・単科型の大学、リベラルアーツカレッジ、コミュニティカレッジの大きく4種類あるそうです。どの大学の出願書類にも大概エッセイがあります。そのエッセイが大学入試においてとても重要だというのです。この大学に通いたい生徒はどのような人物なのか、どのような活動をし、それを通してどのような考えをもったのかを分かりやすく丁寧にエッセイに綴ります。全受験生のエッセイをアドミッションオフィサーが読み込み、この大学に合っているかどうかを判断するそうです。アメリカの大学入試は、だいたい9月頃から出願が始まり1月頃に出願〆切、合格が発表されるのは5月頃です。約4ヶ月もの間、アドミッションオフィサーは生徒獲得のための合否判定を行います。

つまり、アメリカの大学に受かるためには、自分という人間がどのような考え方をもち、どのような活動をしてきたのかを明確に表現できる力が求められます。さらに、大学が必要とする学生像（アドミッション）は多種多様です。自分という人間が、どの大学にフィットするのかはわかりません。そこで、大学に認めてもらい合格した生徒は、高い就学意識を持って勉学に勤しむのです。なぜなら、筆記試験の点数が評価されたのではなく、自分という一人の人間を評価してくれたからです。

スタンフォード大学
メモリアル・チャーチ

個性を重視するアメリカの教育

アメリカの大学には偏差値という指標はありません。それぞれの大学のアドミッションオフィサーや教授達が指標です。あと○○点で合格というのもないようです。自分という人間の個性が明確に表現された文章から、大学が『合う』『合わない』の二択をするだけです。つまり、個性を磨き、それをうまく表現する力をつければ誰にでもチャンスがある入試システムなのです。

ハーバード大学
ジョン・ハーバード像

これからの日本の教育について

最後に、改めて日本の教育の在り方について考えさせられる機会となりました。様々な教科の高い水準の知識を獲得し、筆記試験の内容に的確に答える能力というものは、努力の上に成り立つものであり、筆記試験はそれを測るためには適切な方法だと思います。しかし、それ以外の試験を多種多様に設けることで、もっといろいろな子ども達の可能性を引き出すことができるのではないかと考えました。そもそも日本の大学のAO入試というものは、アメリカの大学入試のようにしたかったのだと思います。このグローバル時代を生き抜くことができる生徒を育てるためには、我々教員も積極的に他国と交流し、様々な価値観を知ることが大切だと思いました。そして、早く合格を得るためのAO入試ではなく、子ども達の個性にスポットを当てることができるAO入試が日本に広がることを願います。

マサチューセッツ工科大学
スタタ・センター

「食育とは？」

NPO法人湘南食育ラボ
栄養士　菊地あゆみ

ここ数年「食育」という言葉があちこちで聞かれるようになり、私達の生活・食生活に密着した学びになってきています。さらに、諸々の病気の原因は食生活の習慣ということで、「食育基本方針」という新たな法律ができ、予防医学的な考えも踏まえております。ここ湘南学園でも食育が学校の方針の一つになっています。ラボでも「私達にできること」を発信していきます。

食育はだれのもの？

子供は学校で学ぶ機会がありますが、大人のほとんどは「食育」という形で学んで来ていないのが現状です。皆さんも経験があると思いますが、

「分かっているけど…、つい…。」と思った事はありませんか？

「分かっているけど…濃い味が好き！」

「分かっているけど…朝食が食べられない！」

「分かっているけど…加工食品が多くなってしまって！」

「分かっているけど…家族そろっては無理！」

ラボではシンプルに家族に食べてもらいたいメニューや食材を選んでいます。大人になった時にラボの味をお母さんの次に思い出してくだされば本望です！そして何より、みんなで食べる楽しさを感じて欲しいと思います。

平成25年12月、「和食、日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録

このニュースをどう受け取りましたでしょうか？私は「和食」が日本からなくなりそうだからあえて登録されたのだと危惧致しました。昭和30年代以降の食生活の多様化で、長期的に《和食離れ》が進行しています。和食の中心であるコメの消費量も、40年前の約半分にまで落ち込んでいます。

日本から和食がなくなったら私たちは日本人として諸外国にどのように食文化を語るのでしょう。

基本は挨拶

生活同様「食」でも基本は挨拶です。

「いただきます」「ごちそうさま」きちんと挨拶できていますか？

「いただきます」は、動物、魚などの命をいただくということへの感謝。そして、昔は食材を集めたり運んだりすることが大変でした。それらの人や料理した人に対する感謝の気持ちを込めて「ごちそうさま」と言います。

食事の挨拶の意味を説明してあげれば、自然と口から感謝の言葉がきっとでてくる事でしょう。

最後に

「食育」は子供達だけに限定されがちですが、この世に生まれた時から始まり死ぬまで続きます。それぞれのライフステージにあった食育があることを知り、未来の大人になる子供達に伝えていきたいと考えております。

「役割と変わらぬ応援」

後援会会長　田辺真理

後援会は来年度、発足十周年を迎えます。PTAのOB・OGである後援会には、概ね二つの役割があるとこれまでの活動を通じて感じています。

一つは、湘南学園の子ども達の笑顔を見られるような、幸せな未来へ繋がるような、実りある支援活動を続けること。

二つ目は、学園の経営に深く携わってきた理事・監事経験者の元保護者・元教職員が多数会員として在籍しているため、学園の歴史や伝統を客観的に見極め、伝えていく手助けができることだと思います。

主な活動としては、昨年度もPTAバザーに参加させて頂き、収益金十四万三千九百三十円をPTAに寄付させて頂きました。

チーム湘南学園として松ぼっくりフォーラムへの参加、ヤングアメリカンズへの協賛、留学生のホームステイお手伝いもいたしております。

小学校アフタースクールにおいては、四年間お料理教室講師をされている大谷津雪さんを始め、通年子ども達の下校時の随伴ボランティアとしてのご協力もさせて頂いております。

更に、ここ数年湘南学園においても力を注がれているグローバル教育の一環として「後援会英語力向上機会提供プログラム」を提案させて頂き、昨年初めての取り組みとして企画幹事の徳光健を中心に、小学校で開催された「ブリティッシュヒルズイングリッシュセミナー」のお手伝いをさせて頂きました。

平成二十八年十二月、五・六年生十八名が参加し、保護者、同窓生、後援会の計十二名のボランティアが、入国審査・両替・交通案内・ホテルフロント・案内係の役割を担い、全て英語のみで応対する英語と異文化体験を行いました。緊張した面持ちでミッションに挑んだ子ども達も、終了後用意した飲み物とお菓子を食べながら、徐々に緊張が解れ友達同士で楽しそうに感想を言い合ったり、自信と希望に満ち溢れた笑顔をたくさん見ることができ、私達も貴重な体験をさせて頂きました。このプログラムは、今後も様々な形で幼稚園、中高へも広げていけたらと願っております。

子どもは宝です。この子達の未来を少しでも明るい輝かしいものにできるよう、微力でも湘南学園のお役に立てればという思いで、この先も変わらぬ応援を続けてまいる所存です。

《学校法人から》

【理事会報告】

これまでに、次の理事会を開催いたしましたのでご報告いたします。

第1回定例理事会　4月8日
第1回臨時理事会　4月21日
第2回臨時理事会　5月12日
第1回常任理事会　5月13日
第2回定例理事会　5月27日
第3回臨時理事会　6月9日
第3回定例理事会　6月24日
第4回臨時理事会　7月1日
第4回定例理事会　7月22日
第5回定例理事会　8月19日

〔主要な議題・報告等〕

・理事職務分掌について
・２０１７年度中高国語科講師に係る派遣業者との委託契約について
・特定非営利活動法人湘南食育ラボとの２０１７年度の契約について
・特定非営利活動法人湘南食育ラボへの精算システム使用料の支払いについて
・２０１７年度神奈川県私立中高協会の負担金等の支払いについて
・２０１６年度カフェテリア業務委託の決算報告について
・クラウドファンディング導入費用の支払いについて
・小学校ＩＣＴ機器の導入について
・中高プロジェクタの設置について
・第二松が岡邸修繕工事業者の選定について
・幼稚園オーニング生地交換業者の選定について
・２０１７（平成29）年度　固定資産の除却（案）について
・スポーツ振興センター災害共済給付掛金の支払いについて
・中高学校案内新版の制作費支払について
・２０１６（平成28）年度事業報告（案）について
・２０１６（平成28）年度決算報告（案）について
・２０１６（平成28）年度事業報告書の確定について
・２０１６（平成28）年度決算書の確定について
・個人情報取扱規程の制定について（個人情報取扱規程の廃止）
・２０１７年度　幼稚園・小学校・中高長期修繕工事業者の選定について
・平成29年度県議会議長への請願署名の趣旨とお願いについて
・中高クラス棟空調機オーバーホール及び全熱交換器の内部洗浄について
・米国ワールドランキングトップ大学視察企画への参加費支払について
・２０１７年度特別事業「機器リプレース」について
・固定資産（小学校メディアセンター図書）の除却について
・清掃等建物管理業務契約について
・会計（法定）監査法人との契約について

【評議員会報告】

これまでに開催された評議員会についてご報告いたします。

第1回評議員会　5月27日
第2回評議員会　7月1日

〔主要な諮問事項等〕

・２０１６（平成28）年度事業報告書（案）について
・２０１６（平成28）年度決算書（案）について
・２０１７（平成29）年度固定資産の除却（案）について
・四号保護者理事の選任について

【平成28年度 長期修繕工事完了のご報告】

平成29年度の長期修繕工事（幼稚園ホール空調機更新等、小学校西校舎屋上防水工事、中高クラス棟外壁塗装）につきまして、皆様のご協力により、事故など一切無く、完了いたしました事をご報告いたします。工事期間中は何かとご不便・ご面倒をおかけいたしましたが、ご理解とご協力を賜りました事かさねてお礼申し上げます。

【事務局からのご連絡】

〔住所変更のお手続きについて〕

お引越し等の事由により、ご登録頂いている住所が変更された場合は、誠に恐れ入りますが、住所変更のお手続きをお願い申し上げます。なお住所変更に係る所定の様式は、事務局に準備させて頂いておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

〔登下校・登降園時の自家用車送迎禁止について〕

湘南学園では、園児・児童・生徒の登下校・登降園にあたっては、自家用車での送迎は原則禁止とさせて頂いております。園児・児童・生徒の安全確保はもとより、近隣の住民の方等への安全配慮もご考慮いただき、改めてご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。なお、園児・児童・生徒の病気や怪我等の特別な事情で止むを得ない場合は、必ず事前に学校（園）にご連絡くださいますようお願い申し上げます。